

国衙・郡衙・古寺跡等  
範囲確認調査概要報告書 I

1992・3

宮崎県教育委員会

国衙・郡衙・古寺跡等  
範囲確認調査概要報告書 I

平成3年度

1992・3

宮崎県教育委員会

## 序

埋蔵文化財の保護・活用につきましては日頃から深い御理解をいただき厚くお礼申しあげます。

さて古代における地方政治の中心的役割を果たした政庁跡（国衙・郡衙）等は本県においては国分寺を除いてその位置が明確にされていませんでしたが、宮崎県教育委員会では昭和63年度から平成2年度の3か年、国庫補助を受けて国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査を実施しました。その結果、稚児ヶ池と都萬神社に挟まれた寺崎地区一帯が国府の可能性が非常に高まるとともに国分寺でもかなりの成果があがりました。

そこで平成3年度から5か年計画で引き続き国衙・郡衙・古寺跡等の範囲確認調査を実施することになりました。

本書は、今年度行いました確認調査の成果をまとめたものです。今後の調査研究の基礎資料として各方面でご活用いただくとともに、保護啓発のための一役となることを期待します。

平成4年3月

宮崎県教育委員会

教育長 高山義孝

## 例 言

1. 本書は、宮崎県教育委員会が国庫補助を受けて、平成3年度から平成7年度の5か年に実施する国衙・郡衙・古寺跡等の範囲確認調査の平成3年度の概要報告書である。
2. 分布調査及び試掘調査は、第I章に示す調査組織に基づき、長津宗重が担当した。遺物の実測・拓本・トレースは伊集院康子・押川保子・田村とし子・富永優子・長田博子が行った。
3. 本書の執筆・編集は長津が当たった。
4. 調査にあたっては、調査指導委員会の委員の先生方に御指導をいただいた。また西都市教育委員会・佐土原町教育委員会をはじめ関係市町村教育委員会、県総合博物館、西都原資料館にはいろいろと御協力いただき、記して感謝する次第である。
5. 土器・瓦・土層の色調は農林省農林水産技術会事務局監修の標準土色帖による。本報告の方位は磁北である。またレベルは海拔絶対高である。
6. 分布調査及び試掘調査で出土した遺物は、県総合博物館埋蔵文化財センターにおいて保管している。

## 本文目次

序

例言

第 I 章	はじめに	1
第 1 節	調査の経緯と組織	1
第 2 節	調査の概要	5
第 II 章	試掘調査の結果	6
第 1 節	童子丸遺跡	6
第 2 節	上妻遺跡	11
第 III 章	まとめ	23

## 挿図目次

第 1 図	国府推定位置図	3
第 2 図	発掘調査地点位置図	7 ~ 8
第 3 図	童子丸遺跡試掘地点位置図	9
第 4 図	童子丸遺跡トレンチ実測図	10
第 5 図	上妻遺跡試掘地点位置図	12
第 6 図	上妻遺跡トレンチ位置図	13
第 7 図	出土遺物実測図 ( I )	15
第 8 図	出土遺物実測図 ( II )	16
第 9 図	出土遺物実測図 ( III )	18
第 10 図	出土遺物実測図 ( IV )	19

## 表目次

第1表	出土瓦観察表	20
第2表	出土土器観察表(1)	21
第3表	出土土器観察表(2)	22

## 図版目次

図版1	西都市調査地周辺の地形	25
図版2	童子丸遺跡第1地点全景・童子丸遺跡第1地点第1トレンチ	26
図版3	童子丸遺跡第2地点第1・2トレンチ・童子丸遺跡第2地点第2トレンチ埋襲	27
図版4	童子丸遺跡第3地点全景・童子丸遺跡第3地点第4トレンチ	28
図版5	上妻遺跡第1地点全景(調査前)・上妻遺跡第1地点全景(調査後)	29
図版6	上妻遺跡第1地点第7トレンチ・上妻遺跡第1地点第3トレンチ	30

# 第 I 章 はじめに

## 第 1 節 調査の経緯と組織

古代における地方政治の中心的役割を果たした政庁跡（国衙・郡衙）は本県では全然調査されておらず、国分寺跡のみが昭和23年と36年に調査されているだけで、その位置は明確にされていない。また所在地の目安となる奈良・平安時代の布目瓦は県内で13ヶ所（西都市6ヶ所、佐土原町3ヶ所、宮崎市2ヶ所、えびの市1ヶ所、延岡市1ヶ所）で表採されているが、その性格は不明であり、かつその周辺は近年、都市化が進行しつつあり、滅失の恐れがでてきている。そのため、早急にその所在地と範囲を明確にし、遺跡保護のための基礎資料を作成する必要がある。よって宮崎県教育委員会では昭和63年度から3か年計画で国庫補助を受けて国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査を実施した。

まず昭和63年度は布目瓦出土地周辺の分布調査を中心に、日向国府関連の文献調査及び国分尼寺跡推定地の諏訪遺跡（西都市）の試掘調査を平成元年1月26日～2月13日に実施した。その結果、柱穴が検出され、布目瓦・土師器などが出土した。平瓦は凸面が、横方向の縄目叩きが主であり、格子目叩きはわずか1点である。丸瓦には凹面に横方向の縄目叩きを残すものが出土している。土師器には高台付き壙とへら切り底の坏が出土している。しかし、布目瓦の出土層が二次堆積であり、検出された柱穴も国分尼寺関連の掘立柱建物跡とは考えにくい。

平成元年度は、国府推定地及び国分寺・国分尼寺推定地の集中する西都市大字右松から大字三宅を重点的に分布調査を実施した。ほか、えびの市法光寺跡周辺についても実施している。また、西都市国分寺跡、大字三宅字尾筋の国府推定地について寺域及び遺構の残存状況の確認を目的とし試掘調査を実施した。平成元年12月15日～2年3月23日に行われた国分寺の調査で11本のトレンチを入れた結果、T5～7で桁行5間以上、梁行2間の東西方向の掘立柱建物が検出され、「僧坊」と推定されている。従来不明であった伽藍配置の一部が明らかにされた。柱の掘方は長軸0.9～1.2m、短軸0.6～0.8mのく形である。単弁蓮華文軒丸瓦と伴に出土した平瓦は横縄叩きと縦縄叩きがほぼ半々であるのに対して、格子目叩きは少ない。上尾筋遺跡では2本のトレンチを入れたが、奈良時代の時期の遺構・遺物は出土しなかった。

平成2年度は、佐土原町教育委員会が試掘調査を行った下村窯跡が8世紀後半を中心とする須恵器・瓦が出土しているために国分寺の瓦・須恵器を供給した窯である可能性が高まったため、平成3年2月12日～22日には布目瓦が表採されたという佐土原町上田島・西上那珂の丘陵斜面の瓦窯の分布調査を実施した結果、下村窯跡が立地する丘陵の南の叶迫遺跡、西

側の丘陵の堂ヶ迫遺跡・河原田遺跡で布目瓦・須恵器・窯体が表採され窯の存在が確認された。しかし、表採された布目瓦はすべて凸面横縄目叩きであり、那珂小学校蔵の下村表採の格子目瓦の地点は確認できなかった。

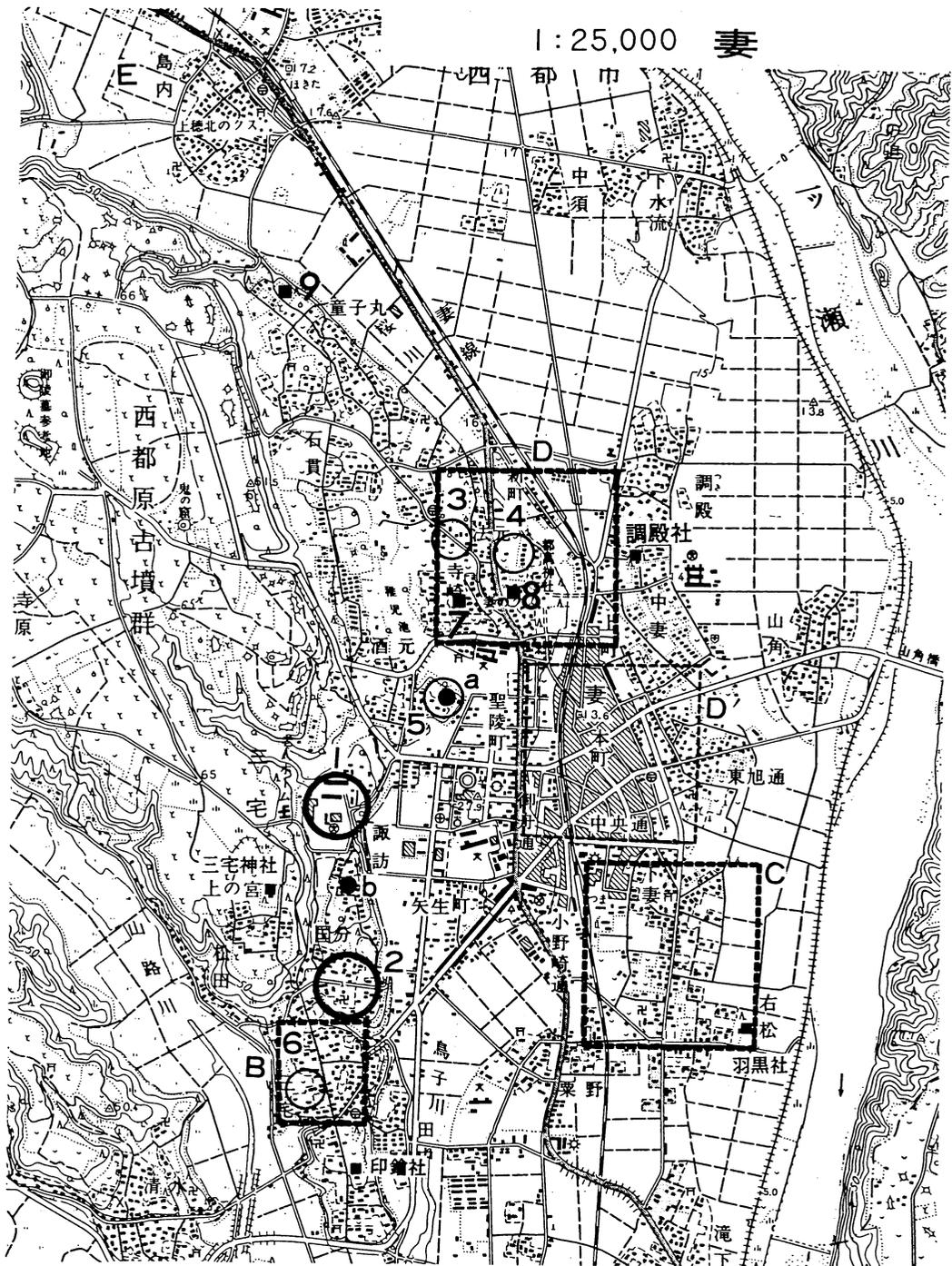
また2年9月17日～10月24日と3年1月16日～3月28日には布目瓦の表採と立地のの上から国府の有力な推定地である西都市大字右松字寺崎の試掘調査を重点的に実施した。その結果、奈良時代の遺物としては特にT8で畿内地方の搬入土器である螺旋状の暗文を施した土師器の坏が出土したことは特に注目される。8本のトレンチから出土した瓦はすべて凸面横方向縄目叩きであり、日向国分寺で出土している凸面格子目叩きの瓦は僅か2点しか出土していない。平瓦の特徴から日向国分寺の瓦と須恵器を生産した可能性が非常に高い佐土原町の下村窯の瓦と良く類似している。しかし丸瓦・軒平瓦は全然出土していない。出土した須恵器は6世紀後半、7世紀後半、8世紀後半の時期であるが、主体は8世紀後半の時期である。須恵器の中には転用硯が3点出土しているが、硯と墨書土器は出土していない。当時期の遺構としては東西方向に伸びる方形プランの掘り方の柱が2本検出され、3棟の掘立柱建物が確認された。

3か年にわたる国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査の結果、次のことが分かった。

第一に国府の所在地に関しては中間台地上の稚児ヶ池と都萬神社に挟まれた地区一帯の推定地D（妻～芻田）が立地や布目瓦の出土分布状況から有力な候補地として浮上してきた（第1図）。また西都市教育委員会が調査した上妻遺跡内の都萬神社の北西側の畑から軒丸瓦の出土からも補強されつつある。試掘調査した寺崎遺跡では方形プランの柱穴が検出され、7世紀末～8世紀後半の須恵器、畿内地方の搬入土器と思われる螺旋状の暗文を施した土師器坏蓋・身、転用硯、凸面縄目叩きの平瓦の出土から更に補強された。推定地D内の上妻遺跡と寺崎遺跡出土の布目瓦が前者は格子目叩き瓦が主体であるのに対して、後者は縄目叩き瓦が主体であるという相違がある印鑰神社と国分寺に挟まれた推定地B（三宅）からも軒丸瓦や布目瓦が出土しており、まだ可能性も残っているが、前方後円墳や円墳が点在していることや占地面积の狭さなどから弱い。しかし、沖積地の推定地C（右松）・D'（妻～芻田）は立地的に困難であり、推定地から除外しても問題ないと思われる。

第二に国分寺については平成元年の試掘調査では主軸が東西方向の2間×5間以上の掘立柱建物が検出され「僧房」と推定されており、昭和36年の調査で不明であった伽藍配置の一部が明らかにされた。しかし、国分尼寺については昭和63年度に試掘調査が行われた諏訪遺跡では残念ながら関連する遺構は検出されなかった。

第三に国分寺跡・寺崎遺跡で出土している凸面横縄目叩きの平瓦と須恵器は、佐土原町教育委員会が平成元年度に試掘調査を行った下村窯跡（佐土原町）で生産された可能性が高まっ



- B三宅 C右松 D妻～芻田 E島内 (B～E国府推定地) 1.国分尼寺推定地(諏訪遺跡) 2.国分寺跡  
 3.寺崎遺跡～法元遺跡 4.上妻遺跡 5.酒元遺跡 6.上尾筋遺跡 7.寺崎遺跡(平成2年度試掘調査)  
 8.上妻遺跡(平成3年度試掘調査) 9.童子丸遺跡 a.児湯郡印出土地 b.石帯出土地

第1図 日向国府推定地位置図

た。しかし、国分寺で出土している凸面格子目叩きの平瓦は下村窯跡では出土していないが、地点は不明であるが、下村の表採資料にはある。また下村窯跡が存在する丘陵の西側の丘陵を分布調査を行った結果、2ヶ所で布目瓦・須恵器が表採され窯跡の存在が推定される。

3か年の遺跡詳細分布調査の結果、国分寺と印鑰神社に挟まれた尾筋地区一帯よりも稚児ヶ池と都萬神社に挟まれた寺崎地区一帯が国府の可能性が非常に高まるとともに国分寺でもかなりの成果があがった。そこで当教育委員会では平成3年度から5か年計画で国庫補助を受けて国衙・郡衙・古寺跡等の範囲確認調査を実施することとなった。

## 調査組織

### 調査主体

#### 宮崎県教育委員会

教育長	高山 義孝
教育次長	安田 天祥
教育次長	宮路 幸雄
文化課長	長友 巖
課長補佐	申間 安圀
庶務係長	税田 輝彦
主査	長友 広海
主査	巻 庄次郎
埋蔵文化財係長	岩永 哲夫

#### 関係市町村教育委員会

### 指導監督

文化庁記念物課文化財調査官	須田 勉
---------------	------

### 調査指導委員会

福岡大学人文学部教授	小田 富士雄
奈良国立文化財研究所主任研究官	山中 敏史
宮崎県文化財保護審議会会長	野口 逸三郎
西都市西都原古墳研究所長	日高 正晴
宮崎県県史編さん室長	永井 哲雄
宮崎県立宮崎北高等学校教諭	阿萬 美水

### 特別調査員

佐賀大学教育学部教授	日野 尚志
------------	-------

鹿児島ラ・サール高等学校教諭	永山修一
調査員	
県文化課埋蔵文化財係主査	長津宗重
県総合博物館主任主事	近藤協
県史編さん室主任主事	日高孝治
西都市教育委員会社会教育課主事	蓑方政幾
佐土原町教育委員会社会教育課主事	木村明史

## 第2節 調査の概要

5か年計画の初年度である平成3年度は9月～10月に畑の作物調査を実施した。

まず国府の範囲の北限を確認するために、平成2年度の西都市教育委員会による試掘調査で凸面横縄叩き瓦が出土したA a地点より北側の童子丸地区の試掘調査を11月25日～12月25日に実施した。第1地点では2m×4mの2本のトレンチを入れた結果、T1で古墳時代の竪穴住居の一部が、T2ではピット群が検出された。第2地点では2本のトレンチを入れた結果、T1とT2から古墳時代の竪穴住居がそれぞれ1軒とピット群が検出された。第3地点では5本のトレンチを入れた結果、T4で古墳時代の竪穴住居が1軒検出された。古墳状の高まりに周溝の確認のためにT5を入れたが、周溝は確認できなかった。これらの古墳時代の竪穴住居は出土土器から6世紀後半～末の時期に比定されるが、調査の目的である奈良時代と平安時代の遺物・遺構は検出されなかった。

次に国府の東限を確認するために、上妻地区の都萬神社西側の試掘調査を平成3年12月26日～平成4年3月31日に行った。16本のトレンチを入れた結果、ほぼ南北方向に伸びる溝状遺構（窪地）と柱穴が検出され、凸面格子目叩き瓦と横縄叩き瓦とともに8世紀後半を中心とする須恵器が出土した。また平安時代の10世紀前半を中心とする時期の土師器・布痕土器なども出土している。しかし、前年度調査の寺崎遺跡に比較すると瓦の出土量が非常に少ない。

調査指導委員会は平成4年3月12日に開催し、調査の方法及び成果の評価について指導・助言を受けた。また平成3年3月6日～7日に特別調査員として永山修一氏に文献を踏まえた指導を、同年3月13日～14日に特別調査員として日野尚志氏に西海道の国府を踏まえた指導を頂いた。

## 第II章 試掘調査の結果

### 第1節 童子丸遺跡

#### 1. 調査区の設定と概要

童子丸遺跡は行政区では西都市大字童子丸に所在する。一ツ瀬川右岸に広がる標高約12mの沖積平野部と標高約50mの西都原古墳群が立地する西都原台地とに挟まれた標高約20m～26mの中間台地の中では一番北側の一段高い標高約25m～30mに位置する。日向国分寺からは北へ約2.2kmである。この中間台地上の国府推定地Dの中には寺崎遺跡・法元遺跡・上妻遺跡が含まれており、この3遺跡から布目瓦が表採・出土している（第2図）。しかし法元遺跡の北に位置する童子丸遺跡については表採されていなかったが、西都市教育委員会の平成2年度の試掘調査によってA a地点で凸面横縄目叩きの平瓦が出土し、国府の北限が広がる可能性がでてきた。

そこで国府の範囲の北限を確認するためにA a地点より更に北西部の童子丸地区の試掘調査を平成3年11月25日～12月25日に3ヶ所で行なった（第3図）。第1地点では11月25日～12月2日に2m×4mのトレンチを2本入れた結果、T1で古墳時代の竪穴住居の一部が、T2ではピット群が検出された。第2地点では12月3日～12日に南北方向に2本のトレンチを入れた結果、古墳時代の竪穴住居がそれぞれ1軒とピット群が検出された（第4図）。第3地点では12月11日～25日に5本のトレンチを入れた結果、T4で古墳時代には竪穴住居が1軒検出された（第4図）。しかし、3地点とも布目瓦の出土はなく、奈良時代に遡る須恵器・土師器も出土しなかった。

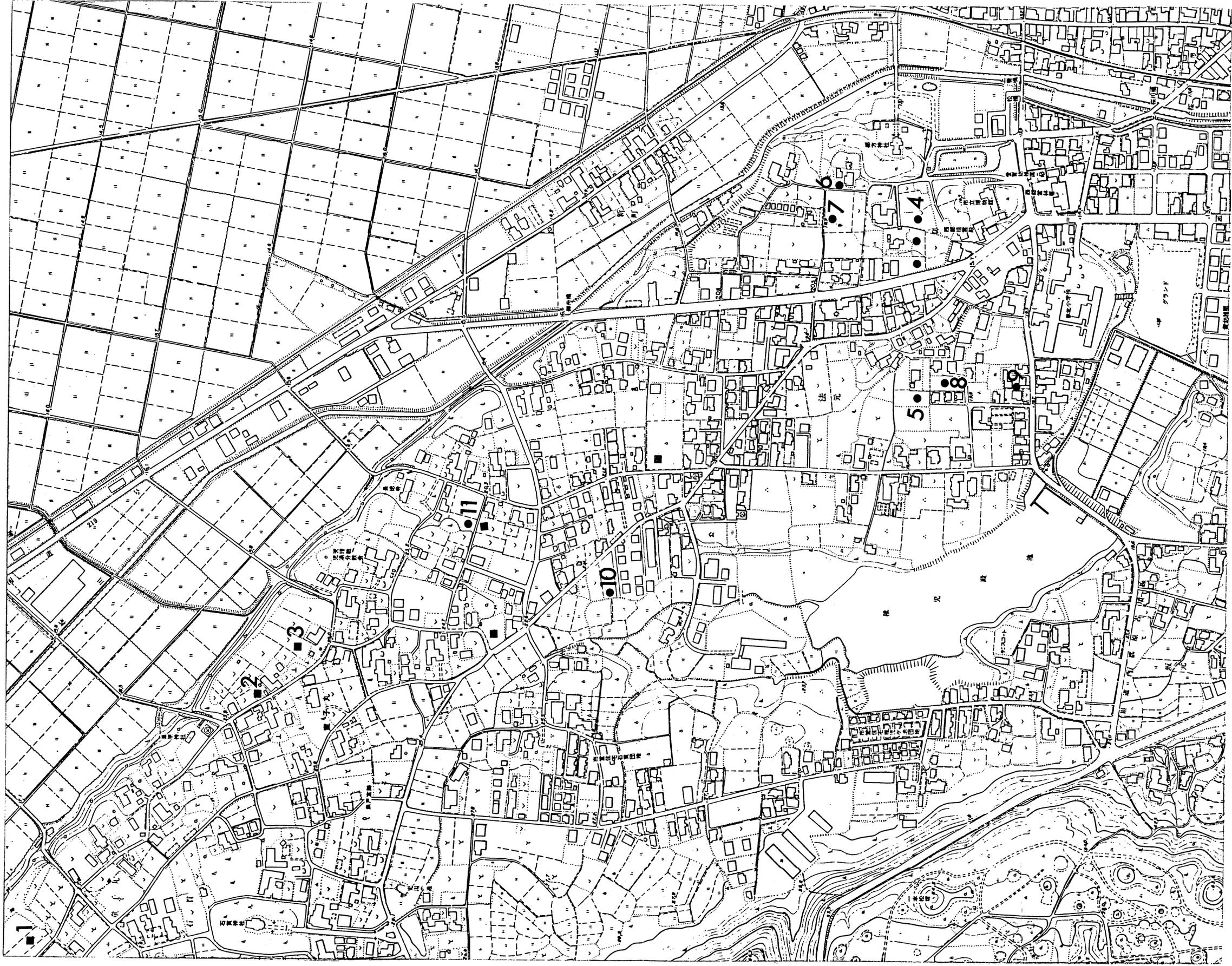
#### 2. 童子丸遺跡第1地点

第1地点は横縄目叩き瓦が出土したA a地点から北西方向へ約750m、6世紀後半の竪穴住居が2軒検出されたC地点からは北西方向へ約50mに位置する。中間台地の北縁で標高は約29mである。第1地点の南東約200mに位置し、西都市教育委員会が平成2年度に試掘調査を行ったC地点では6世紀後半の竪穴住居が検出されている。

T1では古墳時代の竪穴住居の一部が検出されたが、一辺190cm+ $\alpha$ 、壁面の深さは15cmである。検出された一辺の方向は北西～南東方向である。柱穴は住居内を含めて9個検出されたが、すべて円形プランで掘立柱建物が復元されるものはない。

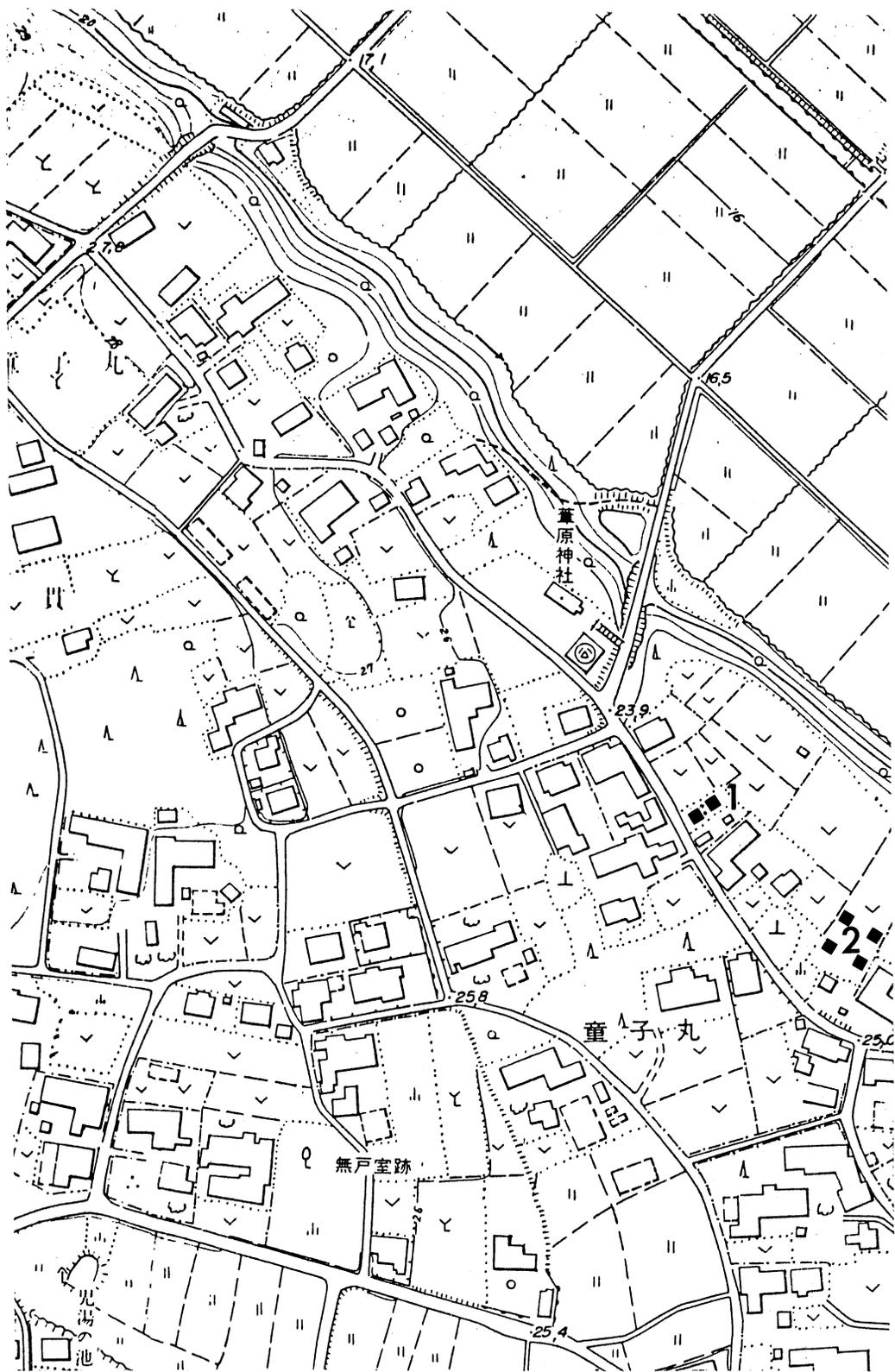
#### 3. 童子丸遺跡第2地点

第2地点はA a地点から北西方向へ約300m離れており、中間台地の北縁で標高約24mである。T2からは住居の中央部に据えつける埋甕が検出されたが住居の輪郭は削平されていた。



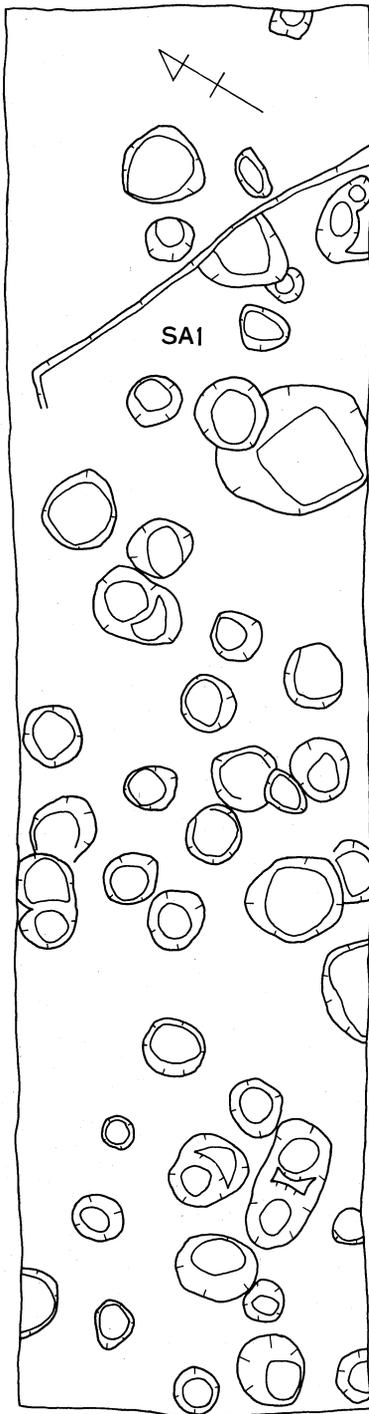
- 1～3 童子丸遺跡試掘地点
- 4 上妻道跡 (平成3年度試掘調査)
- 5 寺崎道跡 (平成2年度試掘調査)
- 7 I 地点 (西都市教委調査)
- 8・9 J 地点 (西都市教委調査)
- 10 K 地点 (西都市教委調査)
- 11 Aa 地点 (西都市教委調査)

第2図 発掘調査地点 (トレンチ) 位置図 ■ 試掘地点 ● 瓦出土地点



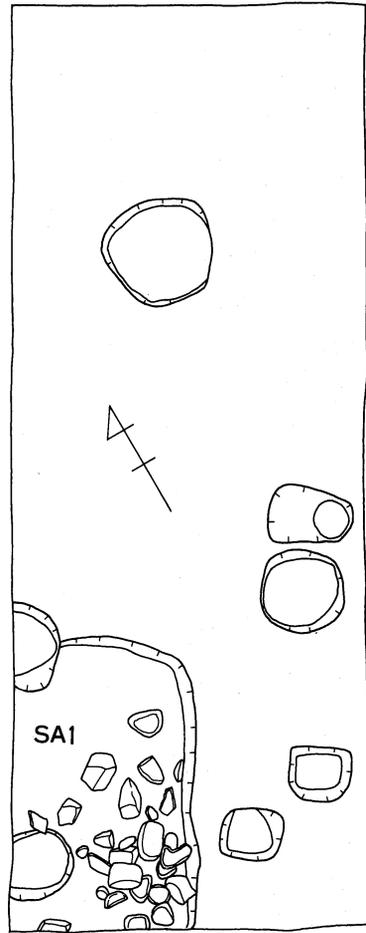
1. 童子丸第2地点 2. 童子丸第3地点

第3図 童子丸遺跡試掘地点位置図

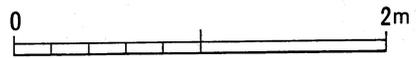


童子丸第2地点

T1



童子丸第3地点 T4



第4図 童子丸遺跡トレンチ実測図

## 第2節 上妻遺跡

### 1. 調査区の設定と概要

上妻遺跡は行政区では西都市大字妻字上妻に所在する。一ツ瀬川右岸に広がる沖積平野部に位置する国府推定地Dで、日向国分寺の北東約1.8kmに位置し、標高18mである。この国府推定地の中には寺崎遺跡・法元遺跡・上妻遺跡が含まれており、この3遺跡からは布目瓦が出土している。なお昨年度調査した寺崎遺跡からは東に約200m離れている（第5図）。

平成3年12月26日～平成4年3月31日に行われた調査ではI区に3m×5mのトレンチを南北方向に8本設定し、試掘調査を行った（第6図）。その結果、今回の分布調査の目的である奈良時代の遺物としては特にT3から凸面格子目2点しか出土しておらず、残りの瓦はすべて凸面横方向縄目叩きである。平瓦の特徴から日向国分寺の瓦と須恵器を生産した可能性が非常に高い佐土原町の下村窯の瓦と良く類似している。また軒丸瓦・軒平瓦も全然出土していない。出土した須恵器は8世紀後半の時期を主体としている。須恵器の中には転用硯・硯・墨書土器は出土していない。当時期の遺構としては東西方向に伸びる方形プランの掘り方の柱が2本検出されたが、1棟の掘立柱建物として範囲を確認することはできなかった。他の時期の遺物としては、縄文時代中期の船元式土器、打製石斧、平安時代の須恵器・土師器・布痕土器、鎌倉時代の青磁などが出土した。

### 2. 包含層の状態

当遺跡のI区はかなり削平を受けているために基本層序は第I層が褐色土層（Hu e7.5Y R 4/4・表土）、第II層が明黄褐色土層（Hu e10Y R 7/6、川原石混じりの小砂利層）である。I区の西側の一段高いII区は第I層が褐色土層（Hu e7.5Y R 4/4・表土）、第II層が黒褐色土層（Hu e7.5Y R 3/1）、第III層がにぶい褐色土層（Hu e7.5Y R 5/4）である。遺物は第II層から瓦・須恵器・土師器等が出土している。

### 3. 奈良時代の遺構と遺物

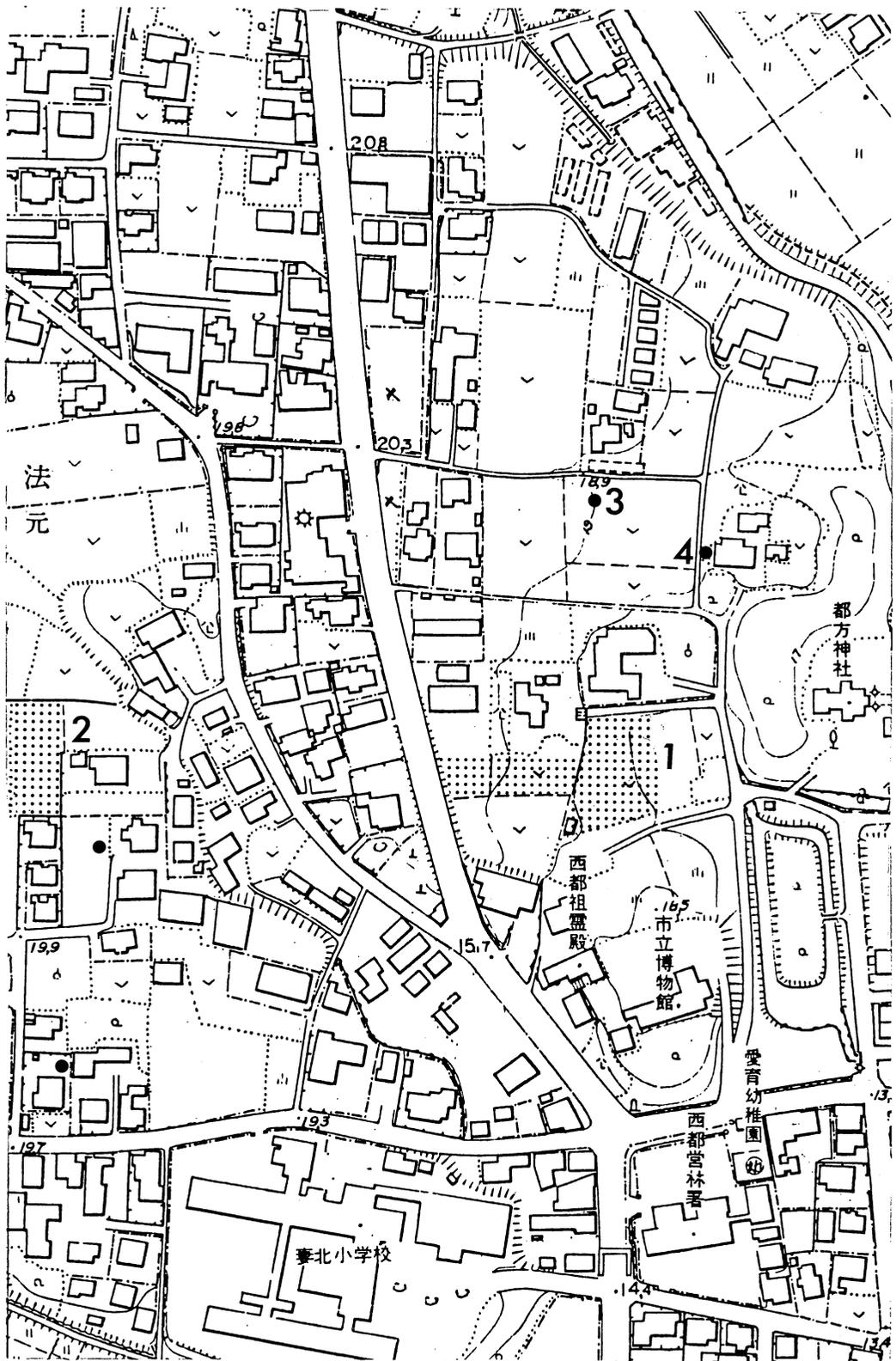
#### (1) 遺構

柱穴はT1～T15で柱穴が15個検出されたが、掘立柱建物が完全に復元されるのではない。T7で検出された柱穴は一辺が80cmの方形プランであるが、周辺がかなり削平されているためにうまく並ばない。

溝状の遺構がほぼ南北方向に走っているのがトレンチで検出され、埋土のI層（川原石混じり暗褐色土層）から8世紀後半から10世紀にかけての遺物が多数出土したが、II層の黒色土層からは縄文時代中期の土器や打製石斧が出土した。自然の窪地である。

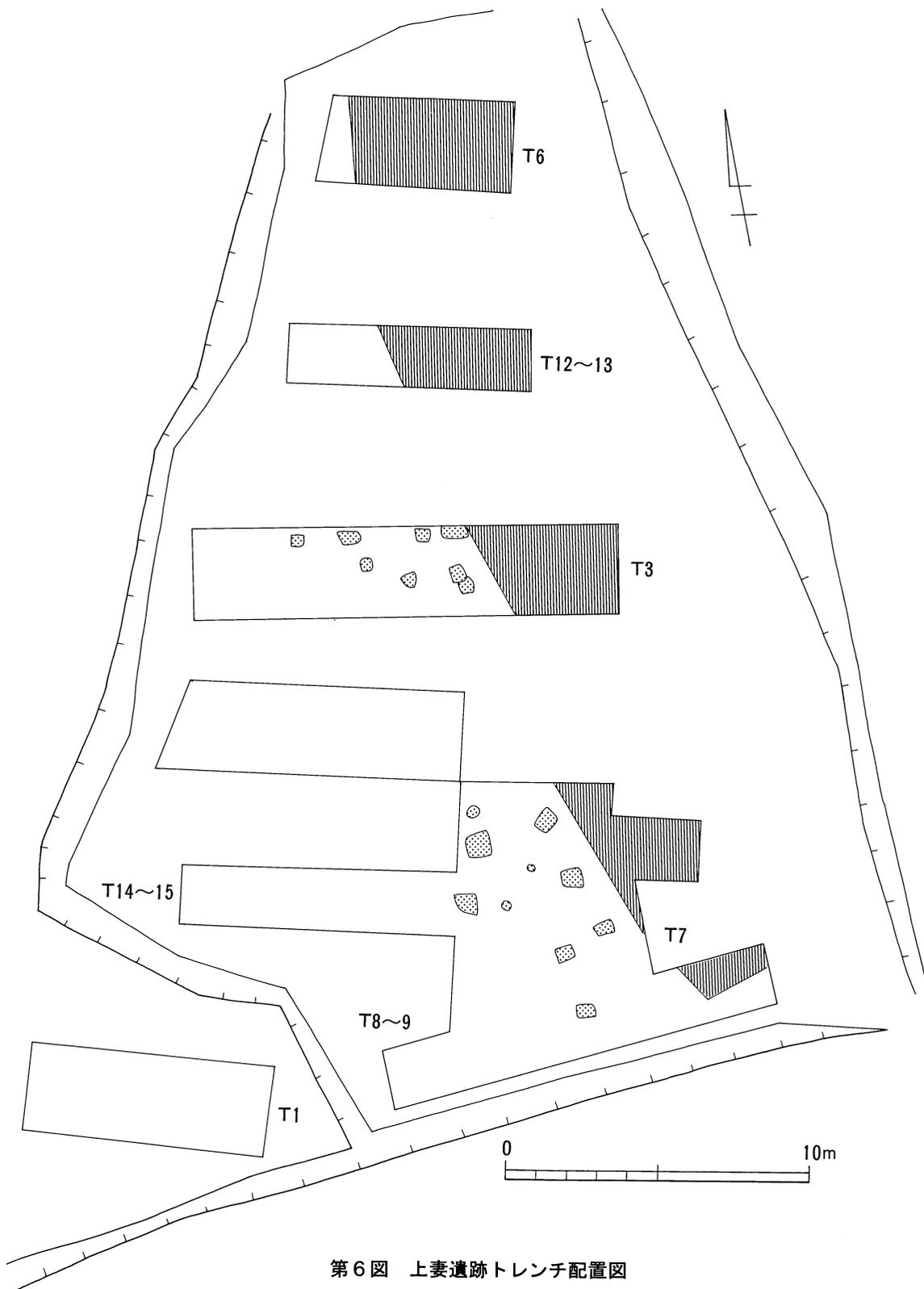
#### (2) 遺物

当遺跡では軒丸瓦・軒平瓦は全然出土しておらず、瓦の出土量も寺崎遺跡より非常に少な



1. 上妻遺跡第1地点 2. 寺崎遺跡（平成2年度調査） 3. I地点（西都市教委調査） 4. 格子目瓦表採地点

第5図 上妻遺跡試掘地点位置図



第6図 上妻遺跡トレンチ配置図

い。当遺跡出土の瓦を凸面の叩きと凹面の調整によって分類した寺崎遺跡の分類にあてはめて説明する。

## 1 平瓦

### 第Ⅰ類 格子目叩き

格子目叩きには正格子・長方形格子はなく斜格子のa類のみである。

#### a 斜格子目叩き (第7図1～3)

1～3は斜格子の一辺長が10mm×8mmの規格のものだけである。1は布目痕を残す。

### 第Ⅱ類 縄目叩き

縄目叩きは5cmあたりの縄目の条数を計測し、13条以下を粗縄目、14条以上を精縄目とすると、精縄目はない。縄目の叩きの方向は横方向のみである。

#### b 横粗縄目 (第7図5～7)

凹面は布目の1類(5)、粗縄目叩きとナデの2類(6・7)のみである。2類には側面の断面によって7のように凹面側を面取りするものと、6のように側面の凸面が段状になるものがある。6は凹・凸面とも面取りしている。

### 第Ⅲ類 叩きの跡をきれいにナデ消す

#### b ナデ (第7図4)

4は凸面は叩きの上からきれいにナデ消し、凹面の調整によってきれいにナデ消す3類である。

## 2 丸瓦

丸瓦は玉縁式と行基式のものがあり、叩きには格子目叩き・平行叩きはない。

#### c 縄目叩き (第8図9～11)

凸面の縄目叩きはすべて横方向であり、横方向の縄目叩きの上の布目の2類(9)、横方向の縄目叩きの3類(10)、丁寧なナデ(11)に分かれる。9は精縄目叩きで、端面は面取りしておらず、非常に焼き締まっている。

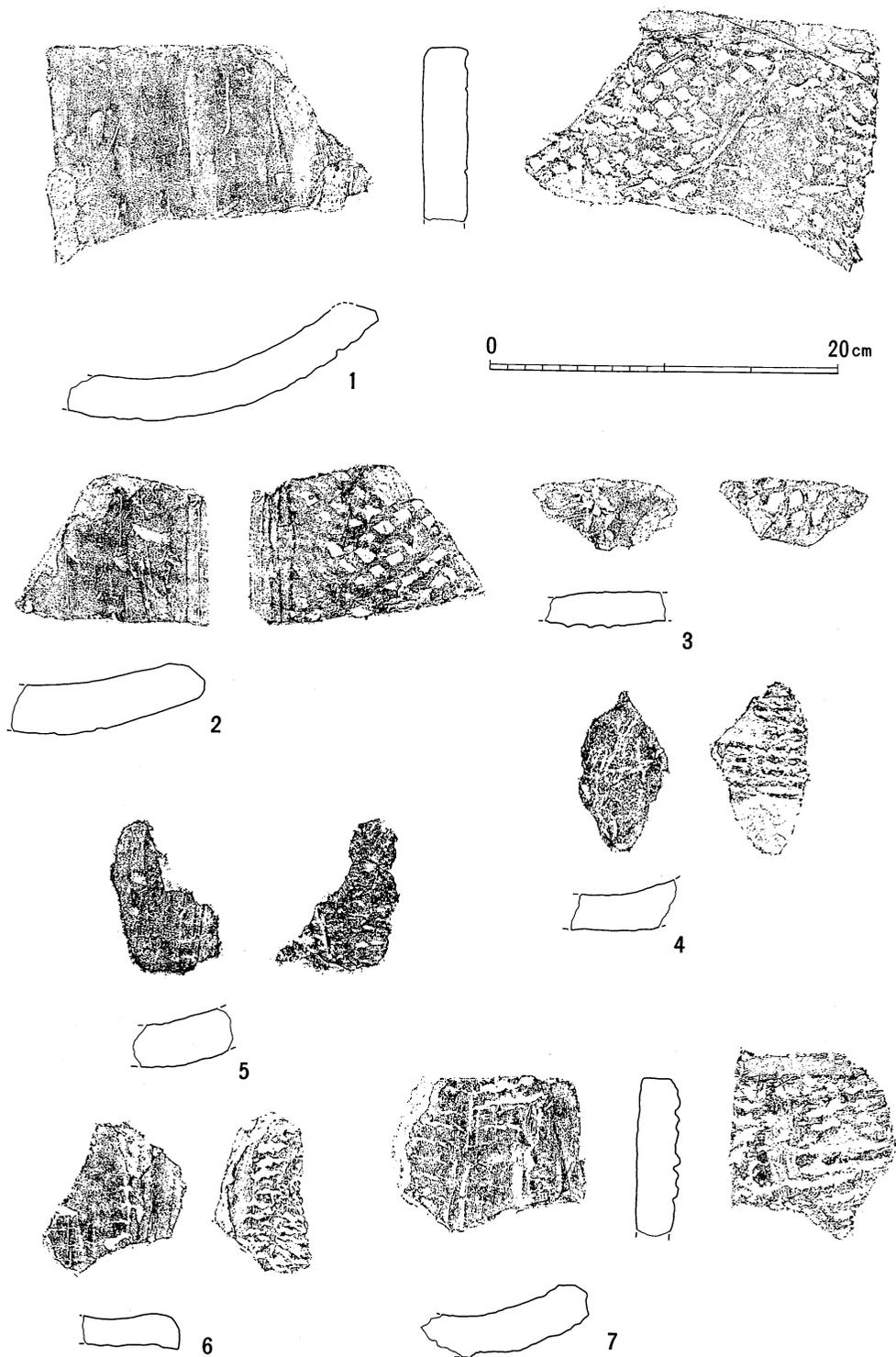
#### d ナデ (第8図8)

8は筒部・玉縁部の凹凸面ともきれいにナデ消しており、筒部の側面は面取りを施している。

## 3 須恵器

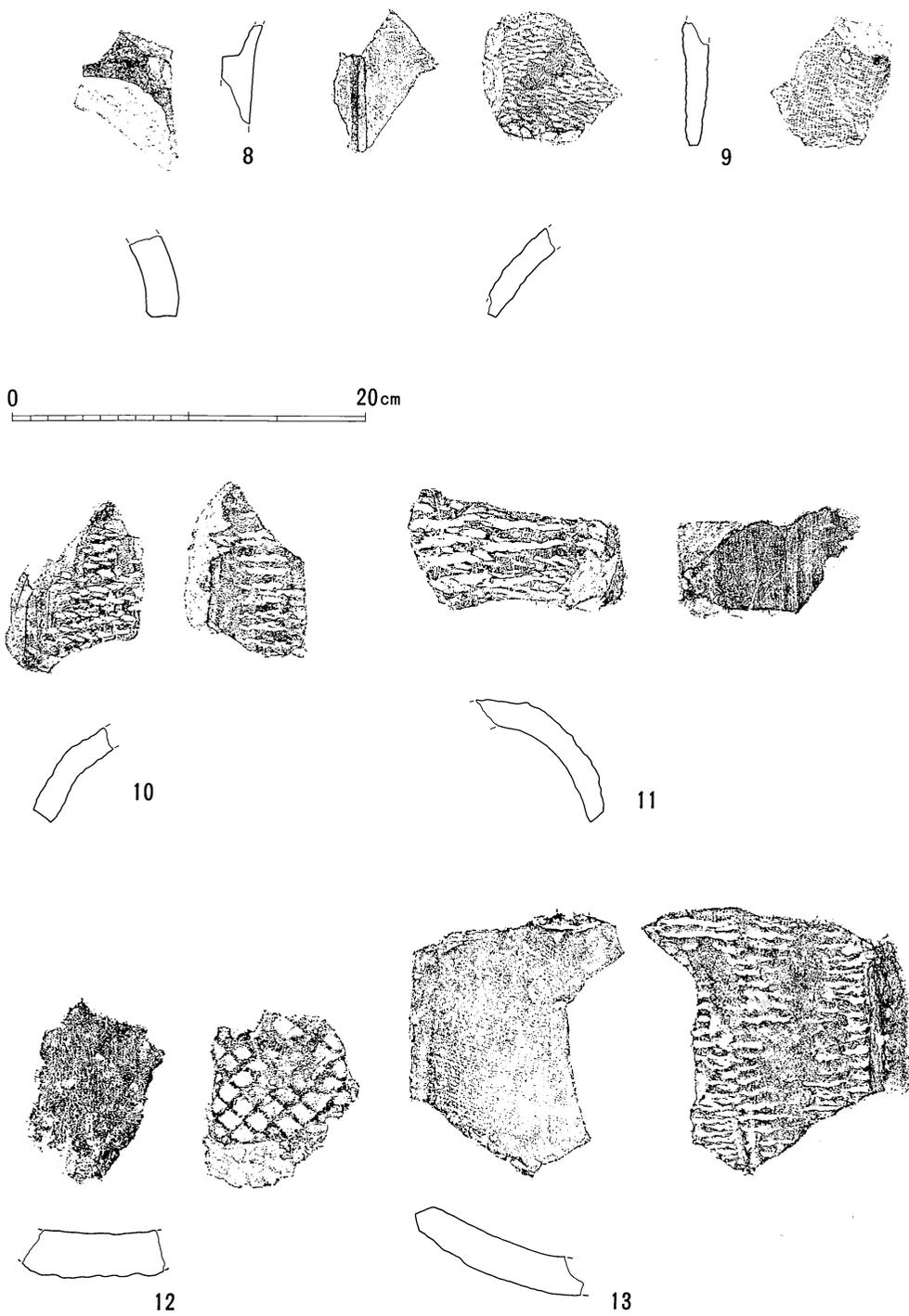
### 坏蓋 (第9図2・3)

撮みを有する2・3は低い天井部に回転ヘラ削りを施してる。端部は2が内側に屈曲するのに対して、3は下方に屈曲する。両者とも口径は14.0cmで、3の器高は2.8cmである。



1~7上妻遺跡

第7図 出土遺物実測図 (I)



8~11上妻遺跡 12・13表採  
 第8圖 出土遺物実測図(Ⅱ)

高台付碗 （第9図13～23）

高台の内側が地につき、外側が跳ね上がるタイプ（13）、高台が断面四角形で端部が凹気味のタイプ（14～18）、高台の外側が地につくタイプ（19～22）がある。底径は14の11.4cmを最大として8.2～8.7cmに集中している。

高坏 （第10図24）

24は坏部と脚部の接合部で、内外面ともヨコナデを施している。

短頸壺の蓋 （第10図25）

25は天井部は平坦で、体部との境に鋭く稜が入る。外面には自然釉がかかる。

瓶 （第10図27）

27は上方に伸びる断面台形の把手を有する瓶で、内面はヨコナデを施している。

瓶 （第10図26・28）

28は胴部最大径が肩部の上位にあり、底部は平底である。胴部下半部には格子目の叩きを残しているが、他の部位はナデ消している。口縁部は欠如している。

4 土師器

坏 （第10図30）

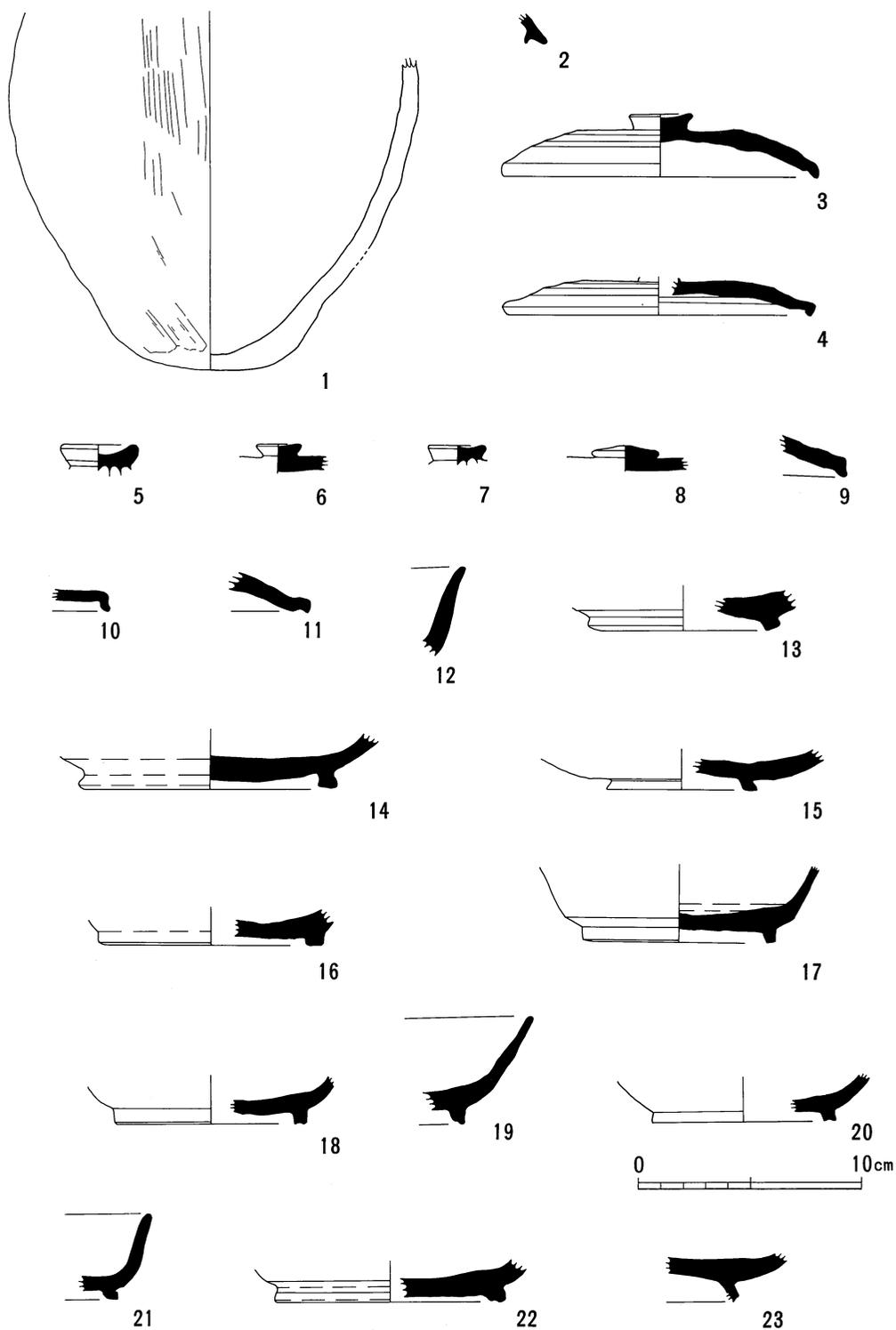
30はへら切りの平底に直線的に開く体部がつく坏で、法量は口径12.5cm、器高4.0cm、底径6.7cmと日向国分寺出土の坏のI-A-2類に相当する。

高台付碗 （第10図31～33）

31は直線的に開く体部に長い脚状の高台がつく碗で、口径13.7cmから国分寺出土の高台付碗21のタイプである。32は少し長めの高台と底径7.4cmから国分寺出土の高台付碗20のタイプである。33は口縁部が内湾気味に立ち上がり端部が少し外反する。高台は断面三角形である。法量は口径9.6cm、器高3.3cm、底径5.6cmである。

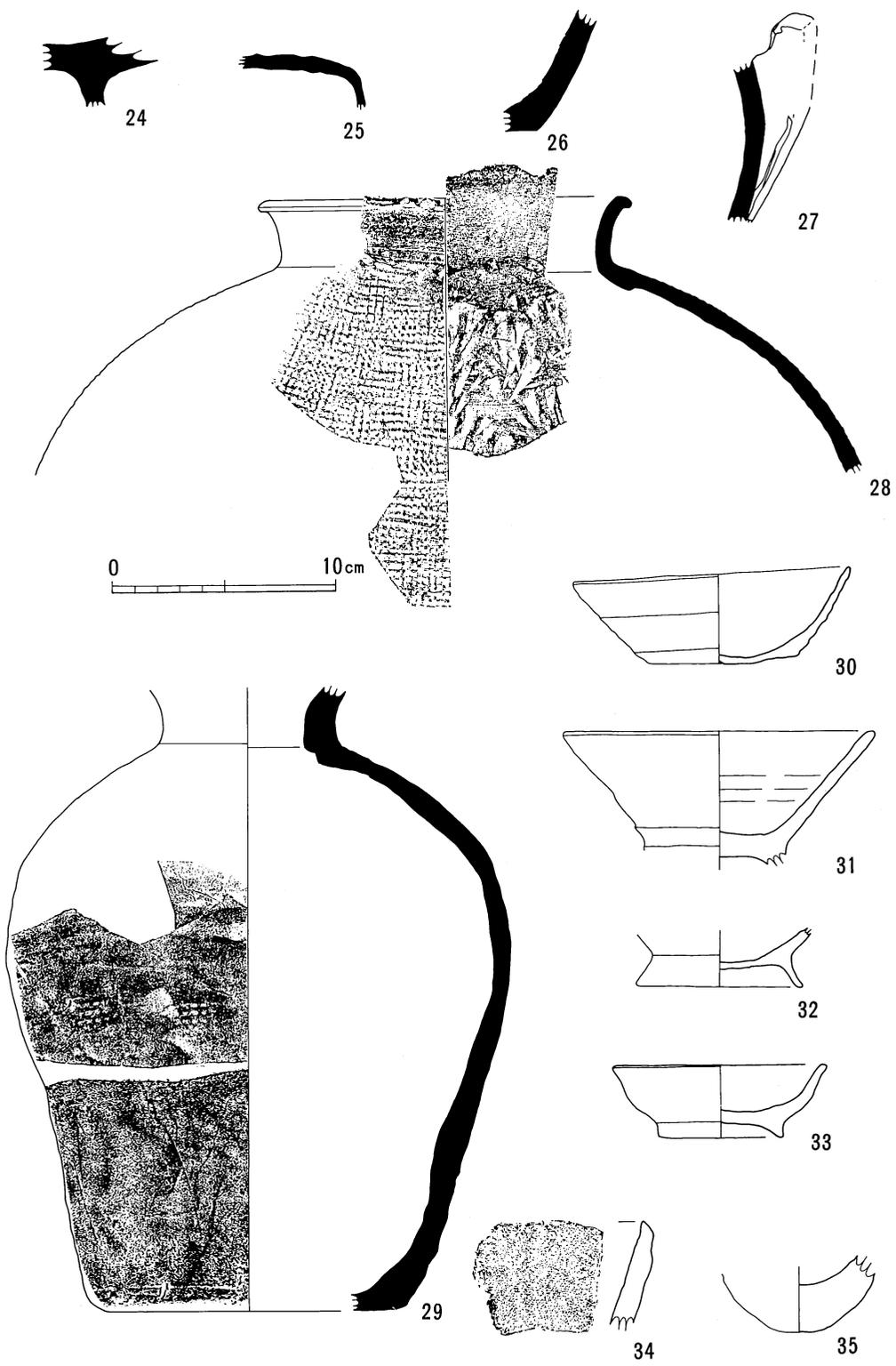
布痕土器 （第10図34・35）

34の口唇部は外方にそぎ落としたように断面三角形であり、内面には布目痕が明瞭に残っている。35は丸底の底部で、内外面ともナデを施している。



1 童子丸遺跡第2地点 2 童子丸遺跡第3地点 3~23上妻遺跡

第9圖 出土遺物実測図(Ⅲ)



24~35上妻遺跡

第10図 出土遺物実測図 (IV)

第1表 出土瓦観察表

遺物 番号	出土区	種類	凸面調整	縄目条数	凸面調整	布目の経緯数	側面調整	端面調整	胎	土	焼成	色		備考
												凸面	凹面	
1	上妻 T3	平瓦	斜め格子目叩き の後ナデ	4×4	布目痕の後ナデ		凹面に面取り	ナデ	粒状~塊状の燻鉄鉱 0.5~2mmの砂粒を含む		やや軟	浅黄橙(10Y R 8/3)	浅黄橙(10Y R 8/4)	
2	T3	平瓦	斜め格子目叩き の後ナデ	5×5	縦方向のナデ		凸凹面に面取り へラ切り		粒状~塊状の燻鉄鉱 0.5~2mmの砂粒を含む		やや軟	浅黄橙(10Y R 8/3)	浅黄橙(10Y R 8/3)	
3	T3	平瓦	正格子目叩きの 後ナデ	5×5	ナデ				0.5~1mmの砂粒を含む		やや軟	灰白(5Y 8/2)	灰白(5Y 8/2)	
4	T3	平瓦	横方向の縄目叩 きの後ナデ	5本	ナデ				塊状の燻鉄鉱 0.5mm以下の細粒を含む		良	灰(5Y 6/1)	オリーブ黒(5Y 3/1)	凹面にス ス付着
5	SE1	平瓦	横方向の縄目叩 きの後ナデ	6本	ナデ				1~1.5mmの砂粒を少量含 む		やや軟	灰白(5Y 8/1)	灰白(5Y 8/2)	
6	T6	平瓦	横方向の縄目叩 きの後ナデ	6本	横方向の縄目叩 きの後ナデ		へラ切り		0.5mm~2mmの砂粒を少量 含む		良好	灰黄(2.5Y 7/2)	灰黄(2.5Y 6/1)	
7	T13	平瓦	横方向の縄目叩 きの後ナデ	5本	横方向の縄目叩 きの後ナデ		凹面に面取り へラ切り	へラ切り	0.5mm以下の細粒を含む		良好	灰オリーブ(5Y 5/2)	灰白(5Y 7/2)	
8	SE1	丸瓦	ナデ		ナデ		へラ切り 凹面に面取り		1~2mmの砂粒を含む		良	灰(7.5Y 6/1)	灰白(5Y 7/2)	
9	T7	丸瓦	横方向の縄目叩 き	12本	布目痕	6×8	横ナデ	ナデ	口径3mmの高師小僧。1~ 2mmの砂粒を含む		良	浅黄橙(10Y R 8/3)	灰黄(2.5Y 6/2)	
10	T7	丸瓦	横方向の縄目叩 き	8本	横方向の縄目叩 きの後ナデ		へラ切り		0.5mm以下の細砂粒少量 1mm前後の砂粒を含む		やや軟	灰(7.5Y 6/1)	灰白(10Y 8/1)	
11	T7	丸瓦	横方向の縄目叩 き	4本	縦方向のナデ				1~3mmの砂粒を含む		良	灰黄(2.5Y 5/3)	灰黄(2.5Y 7/2)	
12	表採	平瓦	横方向の縄目叩 きの後ナデ	7本	布目痕の後ナデ	5×5	へラ切り 凹面に面取り		0.5mm前後の砂粒を少量含 む。		やや軟	浅黄(2.5Y 8/3) 灰白(5Y 7/2)	灰オリーブ(5Y 6/2) 灰白(5Y 8/2)	
13	表採	平瓦	斜め格子目叩き	5×4	縦方向のナデ				1mm前後の砂粒を含む。		良好	灰(5Y 4/1)	灰(5Y 5/1)	

第2表 出土土器観察表(1)

遺物番号	出土区	種別	器種	法量 cm		調整			胎土	色面		焼成	備考
				口径	高さ	底径	外面	内面		底面	外面		
1	童子丸Ⅱ T 2	土師器	甗		16.0+ $\alpha$		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	良好	
2	童子丸Ⅲ T 4	須恵器	坏蓋				横ナデ	横ナデ	灰(5 Y 5/1)	灰(5 Y 5/1)	灰(5 Y 5/1)	堅緻	
3	上妻 T 3	須恵器	坏蓋	(13.9)	2.8		ナデ	ナデ	きめ細かい 0.5mm以下の砂粒を少量含む	明褐色(7.5 Y R 7/2) 灰白(5 Y 7/1)	灰白(5 Y 8/2)	良	
4	T 3	須恵器	坏蓋	(13.4)	2.2+ $\alpha$		ナデ	ナデ	きめ細かい	灰(7.5 Y 6/1)	灰白(10 Y 7/1)	堅緻	
5	T 3	須恵器	坏蓋		1.2+ $\alpha$		ナデ 横ナデ	ナデ	1mm以下の褐色の砂粒を含む	灰(5 Y 6/1)	灰(5 Y 6/1)	堅緻	撮み
6	T 3	須恵器	坏蓋		1.2+ $\alpha$		ナデ	ナデ	0.5mm以下の乳白色の砂粒を少量含む きめ細かい	灰(N 6/0)	緑灰(10 G Y 6/1)	堅緻	撮み
7	T 3	須恵器	坏蓋		2.2+ $\alpha$		ナデ	ナデ	0.5mm以下の透明の光沢粒を含む	灰(5 Y 5/1)	灰白(5 Y 8/2)	良	撮み
8	T 6	須恵器	坏蓋		1.0+ $\alpha$		ナデ	ナデ	きめ細かい 0.5~2mmの淡黄色の砂粒を含む	灰(N 6/0)	灰(10 Y 6/1)	堅緻	撮み
9	T 3	須恵器	坏蓋				横ナデ	横ナデ	きめ細かい	灰白(2.5 Y 8/1)	灰白(2.5 Y 8/2)	良	
10	T 6	須恵器	坏蓋		1.0+ $\alpha$		ナデ	ナデ	1mmの褐色の砂粒を含む	灰白(10 Y 8/1)	灰白(10 Y 8/1)	やや軟	
11	T 3	須恵器	坏蓋				ナデ	ナデ	きめ細かい 0.5mm以下の砂粒を少量含む	黄灰(2.5 Y 6/1)	青灰(5 P B 6/1)	堅緻	
12	T 3	須恵器	高台付甗		3.9+ $\alpha$		横ナデ	横ナデ	1mm以下の砂粒を少量含む	灰(5 Y 5/1)	灰白(5 Y 7/2)	良	
13	T 6	須恵器	高台付甗		1.7+ $\alpha$	(8.5)	横・斜目のナデ	ナデ	2mm以下の白色の砂粒を含む	灰(7.5 Y 6/1)	灰(10 Y 6/1)	良	
14	T 3	須恵器	高台付甗		2.5+ $\alpha$	11.4	ナデ	ナデ	きめ細かい 1mm以下の砂粒を少量含む	オリ-7灰(2.5 G Y 6/1)	オリ-7灰(5 G Y 6/1)	堅緻	
15	T 7	須恵器	高台付甗		1.8+ $\alpha$	(6.7)	横・斜目のナデ	ナデ	3.5mmの白色の粒、2mm以下の茶褐色の砂粒、白色の微粒子を含む	灰(5 Y 5/1)	灰(5 Y 5/1)	堅緻	
16	T 3	須恵器	高台付甗		1.6+ $\alpha$	(9.9)	ナデ	ナデ	きめ細かい 1cm以下の砂粒を含む	灰(5 Y 6/1)	灰(2.5 Y 6/2)	堅緻	
17	T 3	須恵器	高台付甗		3.4+ $\alpha$	(8.7)	ナデ 横ナデ	横ナデ	0.5~1mmの灰色、褐色の砂粒を少量含む	灰白(5 Y 8/2) 灰白(5 Y 7/1)	灰白(5 Y 8/2)	やや軟	内面 外面 スス付着

第3表 出土土器観察表(2)

遺物番号	出土区	種別	器種	法量 cm		調整			胎土	色		焼成	備考
				口径	高さ	外面	内面	底面		外面	内面		
18	上妻 T3	須恵器	高台付埴	2.1+α	(8.6)	横ナデ	横斜目のナデ	ナデ	きめ細かい	灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1)	良	
19	T3	須恵器	高台付埴	4.7		ナデ	ナデ	ナデ	きめ細かい 1mm以下の砂粒を少量含む	灰(5Y5/1)	灰(5Y6/1)	堅緻	
20	SE1	須恵器	高台付埴	2.0+α	(8.2)	ナデ	ナデ	ナデ	きめ細かい 1mm前後の乳白色の砂粒を含む	青灰(5BC5/1)	緑灰(7.5GY5/1)	堅緻	
21	T3	須恵器	高台付埴	3.8		横ナデ	横ナデ	ナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰(10Y5/1)	灰(10Y6/1)	堅緻	
22	T3	須恵器	高台付埴	1.9+α	(10.0)	ナデ	ナデ	ナデ	きめ細かい 1mm以下の砂粒を含む	灰(5Y6/1)	灰(7.5Y6/1)	堅緻	
23	T3	須恵器	高台付埴	21+α		横ナデ	ナデ	横ナデ	2mm以下の砂粒を含む	灰白(5Y8/1) 黄灰(2.5Y6/1)	灰白(2.5Y8/2)	良	
24	T3	須恵器	高台付埴	3.2+α		ナデ	ナデ	ナデ	きめ細かい 1mm以下の砂粒を少量含む	灰(5Y5/1)	灰(5Y5/1)	堅緻	
25	T3	須恵器	壺蓋	2.4+α		ナデ	ナデ	ナデ	きめ細かい 5mmの黒色の礫1コ 0.5mm以下の砂粒少量含む	灰オリーブ(7.5Y6/2)	明紫灰(5R7/1)	堅緻	外面に自然釉
26	T3	須恵器	瓶	5.7+α		ナデ	ナデ	ナデ	きめ細かい 0.5mm以下の褐色、 白色の砂粒を少量含む	灰白(5Y7/1)	灰(5Y6/1)	堅緻	外面に自然釉
27	T6	須恵器	瓶	9.3+α		ナデ	ナデ	ナデ	きめ細かい	灰(5Y6/1)	灰オリーブ(5Y6/2)	やや軟	
28	T3	須恵器	壺	12.6+α		ナデ 横ナデ	ナデ 横ナデ	ナデ	きめ細かい 白色の微粒子を少量含む	灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1)	堅緻	外...格子目タタキ 内...単編タタキ
29	T3	須恵器	瓶	27.9+α	(14.2)	ナデ	ナデ	ナデ	きめ細かい 0.5~1mmの黒色 の砂粒を少量含む	灰(N5/0) 灰白(5Y7/2)	青灰(5PB6/1)	堅緻	外...格子目タタキ
30	T3	土師器	坏	4.0	6.7	横ナデ	横ナデ	ナデ	1~3mmの褐色・黒色の砂粒 を含む	橙(7.5YR7/6)	橙(5YR7/6)	良好	
31	T3	土師器	高台付埴	6.0+α	(13.7)	横ナデ	横ナデ	ナデ	2mm以下の褐色の砂粒、透明で 光る微粒子を含む	浅黄橙(7.5YR8/6)	浅黄橙(7.5YR8/6)	良好	
32	T3	土師器	高台付埴	2.6+α	(7.4)	横ナデ	横ナデ	ナデ	粒状~塊状の褐鉄鉱を含む	浅黄橙(10YR8/3)	浅黄橙(10YR8/4)	やや軟	
33	T6	土師器	高台付埴	(3.3)	(5.6)	ナデ	ナデ	ナデ	0.5~1mmの褐色の砂粒を少量 含む	淡黄(2.5Y8/3)	黄灰(2.5Y6/1)	良好	口縁部、内外面 スス付着
34	T6	土師器	鉢	4.5+α		ナデ	ナデ	ナデ	0.5mm大の褐色、乳白色、黒色の砂 粒、黒色で光沢ある砂粒を含む	橙(5YR6/6)	橙(5YR7/6)	良好	内面に布目痕
35	T3	土師器	鉢	3.3+α		ナデ	ナデ	ナデ	1~2mmの赤褐色の砂粒 3~5mmの赤褐色の礫を含む	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(7.5YR7/6)	良好	

### 第三章 ま と め

昭和63年度から平成2年度の3か年にわたって行った国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査<sup>(1)</sup>と西都市教育委員会の試掘調査<sup>(2)</sup>の結果を踏まえて、今年度から国衙・郡衙・古寺等範囲確認調査を行った。まず今年度は5か年計画の初年度であるので国府の範囲の確認に重点を絞った結果、次のことが分かった。

国府の所在地に関しては中間台地上の稚児ヶ池と都萬神社に挟まれた地区一帯の推定地D<sup>(3)</sup>（妻～勿田）が立地や布目瓦の出土分布状況、試掘調査から最有力な候補地として絞られた。この推定地Dの中には寺崎遺跡・法元遺跡・上妻遺跡が含まれている<sup>(4)</sup>。また西都市教育委員会の調査でも都萬神社の北西の畑のI地点（上妻遺跡の一角）から複弁12葉蓮華文軒丸瓦が出土し、格子目叩きの瓦が主体である<sup>(5)</sup>。一方、平成2年度に試掘調査した寺崎遺跡では方形プランの柱穴が検出され、掘立柱建物が2棟検出された。7世紀末～8世紀後半の須恵器、畿内地方の搬入土器と思われる螺旋状の暗文を施した土師器坏蓋・身、転用硯が出土したが、凸面縄目叩きの瓦が主体である<sup>(6)</sup>。以上のように推定地Dの中でも瓦の様相に差異があることが分かり始めた。

そこで今年度は東限を把握するために上妻遺跡のI地点から南へ100mに位置する都萬神社の西側の畑を調査した結果、方形プランの柱穴は検出されたが、掘立柱建物は復元できなかった。また斜格子目叩きの瓦と共に横縄叩きの瓦が出土したが、平成2年度調査の寺崎遺跡に比較すると出土量が圧倒的に少ない。出土した須恵器は撮みを有する坏蓋のかえりの喪失と高台付碗の高台の特徴から8世紀後半を主体とする時期に比定され、下限は布痕土器と土師器の高台付碗から10世紀前半の時期である。転用硯は1点だけで、須恵器の撮み付坏蓋を利用している。

また北限を把握するために西都市教育委員会の試掘調査によって凸面横縄叩きの平瓦が出土したA a地点<sup>(7)</sup>（童子丸遺跡の一角）より北東部を3か所調査したが、古墳時代の竪穴住居跡が検出されただけで、国府関係の遺物・遺構は検出されなかった。よってA a地点を国府の北限とするかについては今後の調査に期待したい。なお西限については西都市教育委員会のK地点で道路状遺構と共に格子目叩きの瓦が出土している<sup>(8)</sup>。

なお国分寺跡・寺崎遺跡、今回の上妻遺跡で出土している凹凸面横縄目叩きの平瓦・内面車輪状叩きの須恵器は、佐土原町教育委員会が平成2年度に調査を行っている下村窯跡<sup>(9)</sup>（佐土原町大字上那珂字下村）で生産された可能性が更に高まった。しかし、国分寺跡・寺崎遺跡等で出土している凸面格子目叩きの平瓦は下村窯跡では出土していないので、国府・国分

寺周辺の窯の存在が推定される。

以上のように5か年計画の範囲確認調査の初年度の試掘調査を行ったが、本調査の主目的である国府の範囲のうち北限・東限については確定するに至らなかった。また政庁の配置などについても全然不明であるので、今後の調査に負うことが大である。

註

- (1) a 宮崎県教育委員会『国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査概要報告書Ⅰ』1989  
b 宮崎県教育委員会『国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査概要報告書Ⅱ』1990  
c 宮崎県教育委員会『国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ』1991
- (2) a 西都市教育委員会「上尾筋遺跡・下尾筋遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』  
第11集 1990  
b 西都市教育委員会「上妻遺跡他」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第14集 1991
- (3) 註1 a 文献  
木下 良 「西都原古墳群と日向国府」『地形図に歴史を読む』4 1972  
木下 良 「日向国府の変遷」『人文研究』60 1974  
木下 良 『国府』1988
- (4) 西都市教育委員会『西都市遺跡詳細分布調査報告書』1986
- (5) 註2 b 文献
- (6) 註1 c 文献
- (7) 註2 b 文献
- (8) 註2 b 文献
- (9) 平成2年度調査中の遺物については佐土原町教育委員会の木村明史氏の御好意で実見  
させてもらった。  
佐土原町教育委員会「佐土原町遺跡詳細分布調査報告書」『佐土原町文化財調査報告書』  
第5集 1991

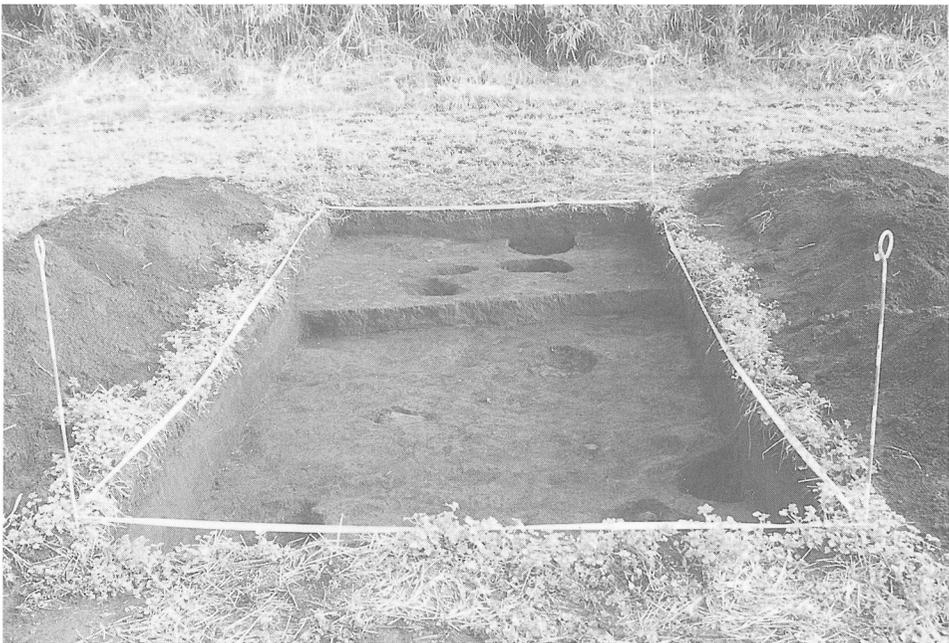


1. 昭和63年度試掘調査地 2・3. 平成元年度調査 4. 平成2年度試掘調査地 5. 平成3年度試掘調査地

西都市調査地周辺の地形



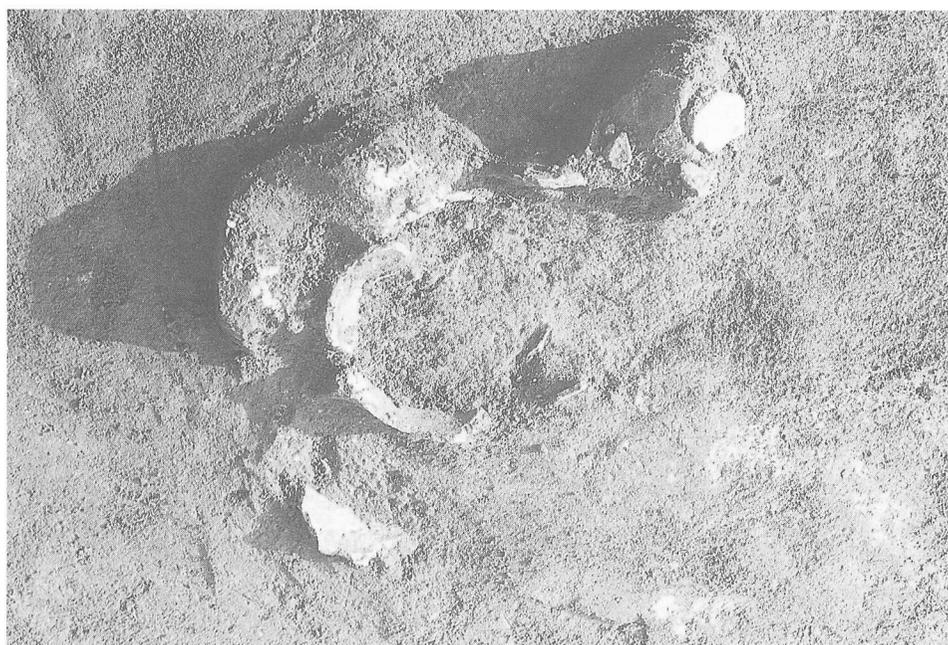
童子丸遺跡第1地点全景



童子丸遺跡第1地点第1トレンチ



童子丸遺跡第2地点第1・2トレンチ



童子丸遺跡第2地点第2トレンチ埋甕



童子丸遺跡第3地点全景



童子丸遺跡第3地点第4トレンチ



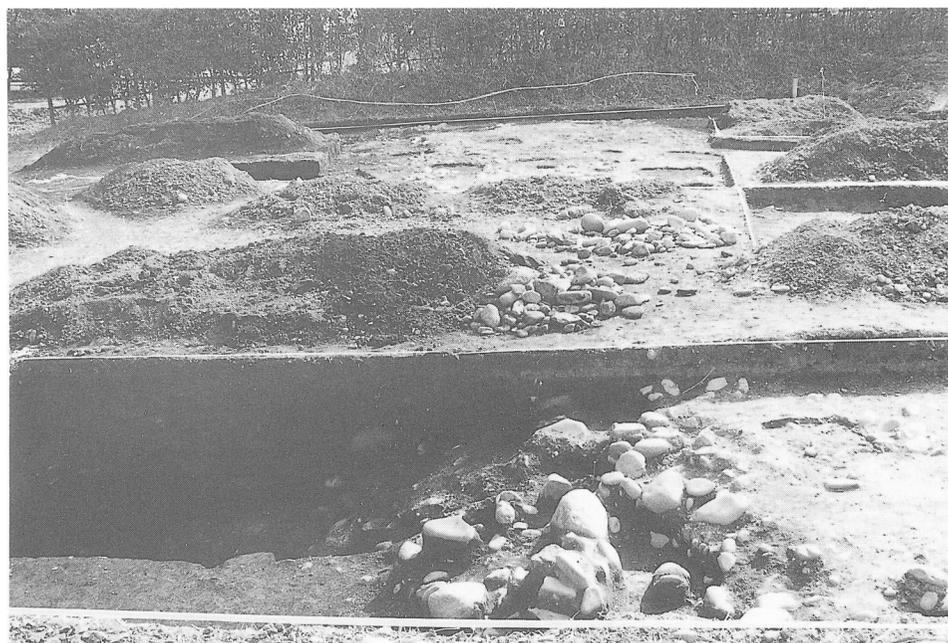
上妻遺跡第1地点全景（調査前）



上妻遺跡第1地点全景（調査後）



上妻遺跡第1地点第7トレンチ



上妻遺跡第1地点第3トレンチ

国衙・郡衙・古寺跡等  
範囲確認調査概要報告書 I

1992年3月

発行 宮崎県教育委員会  
編集 宮崎県教育庁文化課